

たまい場つうしん 第9号

— 大人も子どもも気軽に立ち寄ってお茶のみ話に花が咲く、そんな地域の公民館をめざして名づけました —

第30回白梅利用者発表会



とどけ被災地に 白梅の心

「私たちは 心を一つにして 被災された皆さんを 応援しています」というメッセージを掲げ、利用者の皆さんが一丸となって作り上げた発表会。雨にも負けず、無事終了しました！
(写真は皆さんで太極拳にチャレンジ)

第30回白梅利用者発表会終了

5月28日(土)・29日(日)に第30回白梅利用者発表会が行なわれました。両日ともあいにくの雨でしたが、二日間で949の方が来てくださいました。

例年「白梅まつり」として行なっている行事ですが、今年は東日本大震災の影響を考慮し、利用者の皆さんで話し合っ、名称を「白梅利用者発表会」と変更しました。また、テーマを「とどけ被災地に 白梅の心」とし、「私たちは心を一つにして被災された皆さんを応援しています」というメッセージを掲げ、被災地支援と節電に努めながら行ないました。

被災地支援の取り組みとしては、東日本大震災の被災者に対する義援金を募りました。実行委員会全体として一つ募金箱を設置したほか、各サークルも模擬店などの売上金を寄付したり、演示の中で義援金を集めたりしてくださいました。

その結果、集まった義援金の額は、なんと12万6千214円。募金してくださいました皆さん、ありがとうございました。ごさいます。義援金は6月8日と17日に日本赤十字社を通じて、被災地へ寄付させていただきました。



↑ 演示会場の窓に掲げられたメッセージ

募金へのご協力 ありがとうございます

こちらは全体の募金箱。ただ置いておくだけではなく、白梅利用者交流会の運営委員の皆さんが、募金箱を持って募金をお願いしていました。✓



↑ 「熊川子供囃子連」の女の子。お囃子の演奏中、募金箱を持ってお客さんに募金をお願いしていました。こんなかわいい子に頼まれたら募金するしかない!?



また、実際に被災地に赴いて支援を行なってきた方の報告会を行ないました。その様子は、2、3ページでご紹介しています。

当日は雨模様だったため、室内の照明はあまり落とせませんでした。1階の展示会場は窓側の照明を消すなど、節電に努めました。また、毎年オーブントースターを使ったプラ板工作で子どもたちを楽しませてくれている「ボーイスカウト福生第2団」は、今年はプラ板工作をやめてほかの工作を行なうことで、節電に協力してくださいました。

展示・演示・模擬店・子どものひろば等の出品・出演サークル、そして、雨の中、駐車場等の整理や受付を担当したサークルの皆さんが心を一つにして取り組みました。きつと「白梅の心」は被災地に届いたことでしょう。

ご来場いただいた皆さん、またご協力いただいた関係機関の皆さんに感謝申し上げます。



第30回白梅利用者発表会では、被災地支援と節電をテーマに、「とどけ被災地に、白梅の心」と題して、いくつかの取り組みを行いました。初日の昼には、福生市の職員が被災地を支援してきた内容や現地の様子を伺う機会を設けました。ここでは、当日行なわれたお二人の報告内容を簡単にまとめさせていただき、今後の支援や、地域での人と人とのつながりについて考えていきたいと思います。（文責は白梅分館）

○被災地から学ぶ住民のつながり

吉田翼氏（安全安心まちづくり課防災係）

私は5月10日から五日間、岩手県釜石市に派遣され、避難所運営の支援をさせていただきました。そこで得たことや学んだことを報告します。

- 福生市の被災者(地)支援の取り組みをまとめてみました
- ◆義援金（116,600,002円、4月30日までの受付分）5月23日、市長から日本赤十字社東京都支部事務局長に手渡す。
 - ◆支援物資の受付と搬送（福祉センターにて、おむつ（乳幼児用128袋、大人用277袋）、使い捨てカイロ1,844袋、飲料水計151リットル）
 - ◆市備蓄品の提供（ブルーシート360枚、簡易トイレ60組、乾パン約2,000食、アルファ米2,000食、乾燥おかゆ2,000食、三日間食料セット約3,000食）
 - ◆避難者の一時受入れ（福祉センターにて、延べ13名）
 - ◆避難者の住まいの提供（無償提供いただける方を募集。希望者に紹介。6月13日現在11件の申し出）
 - ◆市営住宅の提供（3戸）
 - ◆自転車の提供（37台）
 - ◆人的派遣（・岩手県大槌町へ行政窓口支援5月2日～7日1名 ・岩手県釜石市へ避難所等の管理運営支援5月10日～15日1名（吉田氏）、5月30日～6月4日1名、6月23日～7月2日2名（予定）。福島県浪江町へ支援金支給業務6月16日～23日1名、宮城県大河原町立大河原小学校へ教諭1名5月9日～1年間）
 - ◆市内への避難者に対するサービス（ふっさげんきサポートカードの配布と各種サービスの提供）
- （6月16日現在）
※吉田氏の報告をもとに、安全安心まちづくり課に資料提供いただきました。

☆東日本大震災

今年3月11日金曜日の14時46分に、震度7、マグニチュード9.0の国内最大級の地震が起こりました。地震による被害は、おもに「津波」によるものです。現在も、各地で余震が継続しています。

★被災地（岩手県釜石市）の様子

ギネス級の湾口防波堤にも関わらず、想定外の大きな津波が、防波堤を乗り越えて、人や車などを飲み込みました。津波は、瓦礫ごと押し寄せてくるので、人はまず助からないのです。しかし、防波堤があるところと無いところでは、被害の規模が全く違ってまいりました。



地震による地盤沈下の影響もあり、海から1キロ隔てた所の公民館にも、津波が3メートルの高さまで来ていました。全長20メートルクラスの船が、陸に上がっていたり、ある中学校では、3階の位置に車が突き刺さったように乗りあがっていました。この中学校の生徒は、陸地の高い方の寺に移動したため、ほとんどが助かりました。残念ながら学校を休んでいた二人は、自宅にいたので亡くなってしまっただそうです。また多くの親御さんたちが、同様に亡くなっています。わずかな1～2メートルの高低

差で、津波にさらわれたところと、全く被害を受けないところがあり、驚くほど生活に差が生じていました。

☆避難者の声

釜石市では地震の揺れに対する被害は、ほとんどなかったそうです。被害のほとんどは津波によるものでした。

★避難所で学んだ最も重要なこと

日頃からの住民同士のつながりが、困った時に生きてくるといふことです。つながりのない人は、ほとんど孤立化してしまいます。つながりは、生死を分けるほど大切だということを実感しました。

○お話を聞いて……「普段からの備えが大事」

その後、政府の地震調査研究推進本部は「立川断層帯」が全国の要警戒の三つの活断層の一つであることを明らかにしました。地震の発生確率は、30年以内に0.5～2%と予測されています。この数字は大雨や台風に罹災する確率（約0.5%）や火災で罹災する確率（1.9%）とほぼ同じだそうです。いざという時、私たちに何ができるのか？ 普段からの備えが大切ですね。



「私は、被災地に派遣されて、避難所の運営などの支援をしてきました。」

○震災から学ぶこと

伊東静一氏(福生市環境課長・前公民館長)

福島県飯館村職員から放射線による風評被害の相談を受け、環境教育学会としてどんな支援ができるのかを研究チームを作って探り、支援の一端として学習教材用パソコン4台を届けました。

★住民の危機感

どんなことが、住民の危機感になっているのかを聞いて歩きました。

- ・住民同士のつながりが無くなるという喪失感
- ・自らの生活基盤を失う危機感
- ・故郷を去らなければならない焦燥感
- ・未来を語れない言いようのない苛立ち
- ・人類としての生命の連続性中断への不安
- ・飯館村へ帰ると結婚できないという差別等々

☆阪神淡路大震災の神戸市真野地区での取り組みから学ぶ

真野地区では、1995年の震災前から住民による住民のためのさまざまな取り組みが、30年以上にわたって行なわれていました。そのため、震災直後に、自分たちの手で住民を助け出し、消火活動を行なうことができました。また、震災発生後2時間ほどで炊き出しを始め、支援物資を私物化しない取り組みなども進んで、その後の大震災の対応モデルにもなっています。



短い時間でしたが、会場からも熱心な質問が…

★東日本大震災から学ぶ

今回の震災においても、まだ自治体や公民館の名前が確認できていないのですが、ある公民館で昨年に地震と津波の脅威を学んで、今回の津波から生き延びた人たちがいました。今こそ、公民館で、地域の課題を仲間と共に系統的・継続的に学習することが大事です。

☆原発による被害の本質は？

地震・津波・原発の被害は甚大ですが、特に原発の問題に対して、私たちは当事者として関わってきたでしょうか。そもそも私たちは、被害者なのか加害者なのか、どういう立場にいるのでしょうか。東京から遠く離れた新潟県や福島県の方などから電力を供給してもらっていますが、

63%は送電線を通過する途中で失われると言われていています。原発の事故は福島だけの問題でしょうか。

★今後の公民館の果たすべき役割

近い将来、震災の発生が予想されますが、白梅分館という学習の拠点で、地域の課題を共有する仲間と系統的・継続的な学習をすることで、人のつながりを生み出し、生き延びる力を身につけ、震災に耐えられるまちづくりができると思います。

学習の規模は、福生市全体というのは無理だと思いますので、隣近所の規模でいいのです。

高齢化や各世帯の構成人数が減っている中で、今後、隣人同士のつながりを再生することが求められますが、ますます公民館の果たす役割が大きくなっていくのではないのでしょうか。

○お話を聞いて・・・「遠くの親戚より近くの他人」

お一人のお話では、日頃からの「地域のつながり」や「防災への学び」が、生死を分けたということでした。特に、つながりのない人は避難所でもどんどん孤立していくという話は、怖いことです。無縁社会の到来と言われる昨今、改めて地域での人のつながりの大事さが浮かび上がってきます。今後も公民館が地域の皆さんと協力して新しいつながりを作っていくお手伝いができるよう、職員一同、精一杯お役に立っていきたいと思います。

